

ダビデ王物語講解説教サムエル記上1 6章14-23節
『サウルとダビデ』

預言者サムエルはイスラエルに王さまを置くことには全く反対でした。しかし神は、王さまを置きたいという民の声を聞き、彼らの声に従うがよい、とサムエルに言いました。それはサムエルにとって驚きだったと思います。しかも神はその時、彼らはエジプトから導き上った日から今日まで、彼らのすることといえば、神を棄てて、他の神々に仕えることだった、そして今も同じことをしているのだ、と言われたのです。そこまで知っておられて神はなお、王を置くことを良しとされたのです。サムエルからすれば、王を置くことで、人々はいよいよ神から離れ、人間に過ぎない王に従い、王もまた神の言葉にはではなく、自分の意志に従うようになる、としか思えなかった。だが神は民の不信仰を重々知りつつ、王を置くことを良しとされた。神はお考えがあつてそうされたのでしょう。その神のお考えを追い求めることがサムエル記を読む大事な意味の一つです。

サムエルは王を置くことは反対でしたが、神の言葉に聞き従いました。そして選ばれたのがイスラエルの初代王サウルでした。サウルは王となって、それまで軍隊と呼べるようなものがなかったイスラエルに王の軍隊を整え、少しずつその軍事力を増強していきます。戦争には勝ち進んでいきます。しかしサウルは次第に微妙に神の言葉から逸れていきます。神の言葉に聞き従わない、というわけではないけれど、少しずつ自分の勝手な受け取り方で、結果的には自分の思うような形で事を進めていくようになっていきます。このサウルの姿は13章から15章にその微妙なようすが描かれています。サウルの中に王さまになった驕りがなかったか、といえば当然そういうものもあつたでしょうし、わたしたちも日常生活の中で、神の言葉に聞かないわけではないけれど、微妙に逸れていき、気がついたら、自分本位、ということはしょっちゅうあるのではないかと。やがてサウルにとって悲劇的なことが起こります。それはサムエルからの関係の断絶、ということです。サウルが神から命ぜられた言葉を果たさなかった。そのサウルに対してサムエルはあなたは神の言葉に聞き従わなかった、だからあなたはイスラエルの王位から退けられる、と語った。それはサムエルの意見ではない。サムエルが伝えた神の言葉でした。サウルは王位について数年、自分なりに懸命にやってきたし、成果もあげてきたと思つていたのではないかと。それが、神の言葉に聞き従わないので、退位だと言われ、茫然とした、と思います。サウルは肝心なところで神の言葉に聞くのではなく、人々の声に惑わされてその声に聴いてし

まって罪を犯したことを認め、サムエルと一緒に帰って、一緒に神を礼拝してください、と頼みます。しかしサムエルはその申し出を断る。サウルは必死に、執拗にサムエルと一緒に帰ってくださいという。サムエルこそ、自分と神の間の執り成し手であることを知っていたからです。サムエルはサウルの懇願で一緒に帰って礼拝するのですが、その後サムエルは死ぬまで、サウルとは会わなかった。もう言うべき言葉はなかったからです。

そして今日朗読された 14 節。主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった。サウルは王として、神の後ろ盾を失ったし、サムエルも自分とは会ってもくれなくなった。文字通り孤立無援です。たくさんの兵士や家来に囲まれていたであろうけれども、孤立無援なのです。王としての彼を支えていた霊は離れた。変わって悪霊が彼をさいなむ、苦しめるようになった、とあります。サウルは王を退位しなさいとの神の言葉をサムエルから聞いたのに、退位していない。王であり続けている。それは二重の罪を犯していることになります。彼を王として生かし、力づける霊は離れた。そして、神を離れたサウルをさいなむ悪霊が送られたのです。サウルは苦しんだ。家臣たちから見ても、王サウルは気が落ち、気は塞がれていた。鬱的なものもあったかもしれません。神によって選ばれて王になったにもかかわらず、その神が王として退位せよと言い、それでも自分は居座っている。自分から降りれないのです。総理大臣とか、大統領と違い、王が王をやめる制度がなく、王は殺されるか、死ぬまで王なのです。しかも自分の中には、安心とか、平静さが失われている。孤立感は深まっていく。どれほどサウルの心は乱れたか、と思います。

彼の家臣たちは、豎琴を上手にかなでるものを探させてください、といって音楽による慰め、癒しを進言する。サウルが悪霊によってさいなまれる時、豎琴の音色が王さまに慰めを与え気分を良くするでしょう、と進言したのです。音楽による慰め、それがどれほど豊かで深いものか、わたしたちもよく知っています。現代の音楽療法という言葉を持ち出すまでもなく、音楽には心身に深い力を及ぼす働きがあるのです。家臣たちが音楽による慰めを進めたのも無理はありません。

一人の従者が王に適任者がいる、と言う。豎琴の演奏が巧みで、勇敢なもので、言葉も分別があり、外見もよく、まさに神が共におられる人です、と。

従者が推薦したその人物こそ、ダビデでありました。

先週わたしたちはダビデが神によってイスラエルの次の王に選ばれ、油注がれた箇所を読みました。しかしそれは、サムエル以外はまだ王の選びとはだれも知らない、父エッサイも、ダビデ本人も知らないこと、秘められた儀式だった、というべきものでした。ですからここで、サウル王の家臣からダビデは豎琴を奏でる人としてただ呼ばれて、ダビデもそれにこたえた、ということだったのでしよう。むしろダビデはこ

の王の後に自分がイスラエルの王になるとは露だに思っていなかった。だからこそダビデはサウルのもとに行けたのです。ダビデはサウルのもとで豎琴を弾く者として仕えました。

ダビデの豎琴の演奏はすばらしいものだったようです。ダビデは、才能豊かな人で、詩編の中の多くの詩を書く芸術的な才能にも溢れた人でした。サウルの気が塞ぐとき、ダビデの豎琴の音色はサウルの心を慰めたというのです。

それにしても、この聖書の物語を読んで不思議に思うことがあるのではないのでしょうか。まず、サウルの家臣は「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう。」とはつきり言っている。神からの悪霊とはどんなものなのか、よくわかりませんが、神との関係に立ち帰るために神が送られたものには違いないのです。ただ苦しめるための霊ではなく、その中で神との関係に立ち帰るための霊です。神との関係ゆえにサウルは根本苦しんでいるのです。であれば、肝心かなめの神との関係に立ち帰るよう、家臣も、サウル自身もすべきです。サウルの家臣たちは豎琴の優れた引手がいると言った後で、まさに主が共におられる人です、とダビデのことを紹介している。それならなぜ、神と共にある生活を確かなものとするよう進言しないのか。

音楽で慰めを受けることは当然あることですし、そのことを進言した家臣の気持ちもわかります。だがサウルにとって今ここで最も根本的で、最も必要な慰めは神との関係の回復です。王である前に一人の人間として、神の前で、自分の罪をできうる限り正直にのべて、赦しを乞い、神の言葉を受けとめて服従して生きる、つまり神に向かって自分の生きる方向転換をしなければならない。サウルの場合、王位を退けられる、と言われてその言葉には頑として聞こうとしない、神の言葉の前で自分の我がどかない。自分の生き方の前に我が立ちふさがっている。しかもその我自体はサウル自身、手に負えるものではなくなっていくのです。彼はこの後、精神的にも追い詰められていく。

サウルの前からサムエルは立ち去っていきました。まことの意味での助言者がいなくなるのです。そのサムエルとの関係の回復も必要だったのではないか。おおよそ、わたしたち人間はそういう経緯をたどるのかもしれませんが、若い時、親や先生が、助言者になってくれる。友人が助言してくれる。だが大人になり、親も先生もいなくなり、友人の数も次第に減っていき、気がつく、自分に対して、本当の意味で助言してくれる人はごくごく限られてくる。つれあい、数少ない友人、こども。だが、信仰のことになれば、内面のことだけに、限りなく難しい。サウルは王なのです。

王が自分の周りにまことの助言者を置くことはさらに困難なことなのでしょう。家臣たちは、ダビデが主と共にある人だ、とまで言いながら、王よ、あなたも神と共にあれ、

とは言わない。サウルは今ここで、ダビデの音楽で慰められている。だが、残酷と言えば残酷なのだが、サウルはまさにこのダビデとの関係においてさらに深刻な葛藤を抱え込んでいく。王位の継承をめぐるサウルは王位から退位せず、王位継承者であるダビデを殺そうとする。しかしサウルは一方でダビデを自分の娘の婿にするまでにかわいがる。だがサウルはダビデを憎む。

そのような不安を抱えた人間の本当の癒し、平安は神によるしかない。罪人であるわたしたちの本当の癒しは罪人を十字架においてご自分を献げて愛しぬくイエス・キリストの愛と、復活によるいのちしかない。

サウルがほんとうに癒されるのは、本当に平安が与えられるのは、ダビデによってではない。神さまの前に立って、一人の人間として立って、ごめんなさいといい、神さまの愛をもう一度受け、そこから歩みだす以外にはない。醒の歩みからそのことを示されると同時に、サウルにそのことを示してあげたい。